

27/4 ~ 40/7

ヤマハ

エレクトーンE-1型

の手引



YAMAHA

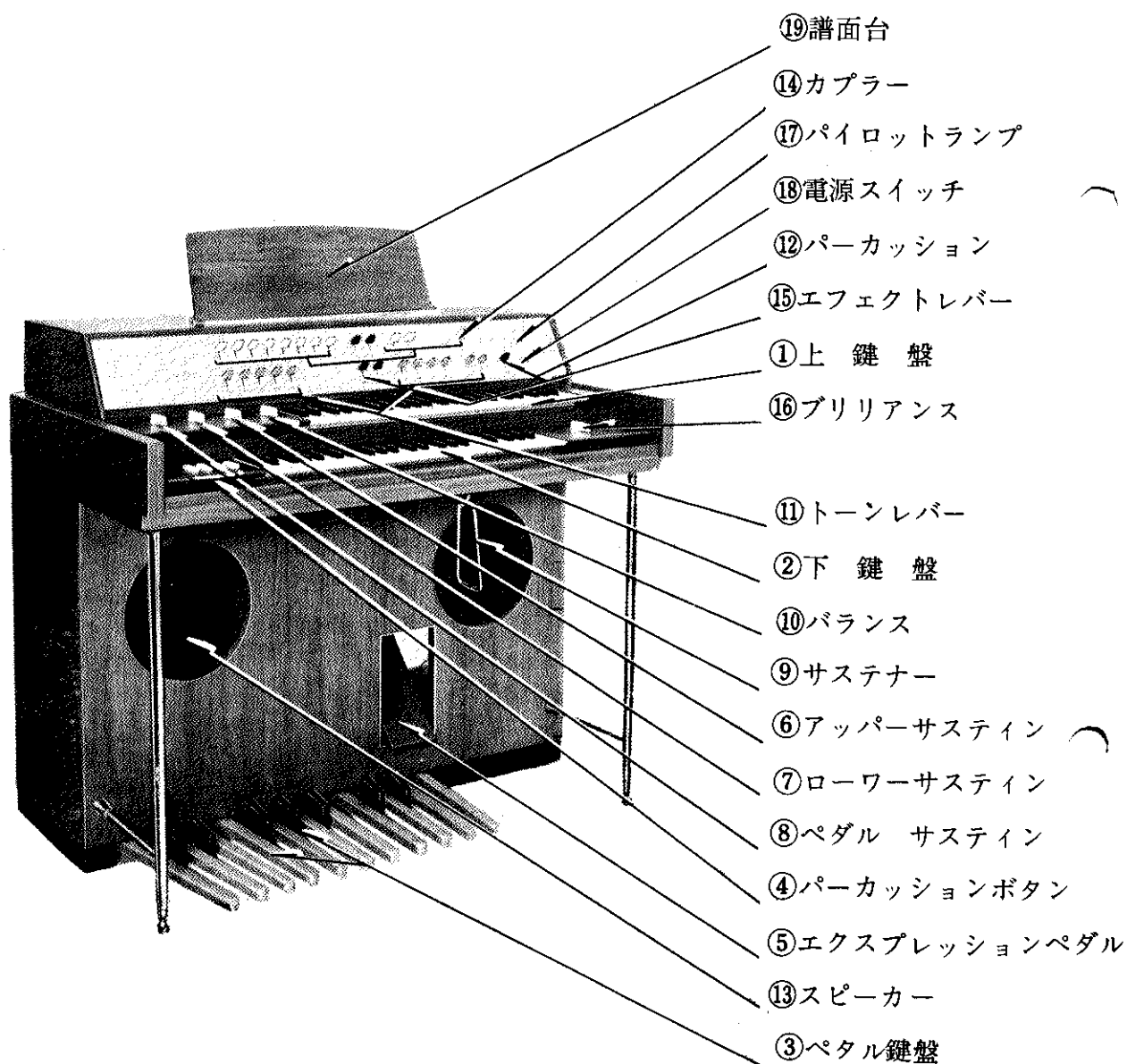
エレクトーン E-1型はD-1の性能を更に向上させたものです。いろいろな部分がより便利に、よりデラックスになり、それにともなって外観も変化しました。しかしそれだけではありません。

音色は厚みをまし、生き生きとして、ほとんど新しい楽器と云いたい位です。演奏効果は何倍にもなるでしょう。

そのひみつは カプラーにあります。一つの鍵を押しただけで、三つも四つもの鍵を微妙に調節して鳴らしたのとおなじ効果が出るからです。

新しいエレクトーンE-1で新しい音の世界をひらいて下さい。

ヤマハエレクトーン外観各部名称



写真について、各部分を説明しましょう。

鍵盤 ① ② ③ ④

上鍵盤の音域は、 C_2 から C_6 までの4オクターブ、下鍵盤は、 C_1 から C_5 までの4オクターブ、どちらも49鍵です。足元にはペダル鍵盤 ③があります。 C_0 から C_3 までの18鍵で、ベースの役目を受け持ちます。以上3つの鍵盤が、メロディーとハーモニーを作りますが、他にリズムの効果に利用出来る、パーカッション・ボタン④が4コあります。このボタンを叩くと、打楽器の音が出ます。

エクスプレッションペダル ⑤

音を大きくしたり小さくしたりして、音楽に表情をつけるしかけ、これがエクスプレッション・ペダル⑤で、右足で踏みます。踏み込めば、音が大きく、戻せば小さくなります。

サステイン ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

右ヒザの上の位置に、金属のレバーがたたみ込まれています。それを引出してください。サステナー⑨です。

もともと電子楽器の鍵盤…つまりスイッチでは、押した瞬間に音が出て離れた瞬間にプツリと音は切れてしまうはずですが、実際の楽器とくにピアノでは、ペダルを踏んでいれば、キーを離れた後までも余韻が残ります。そういった効果を出すのが、このサステナーです。右ヒザを使って右側に押ししていると、余韻がつかます。

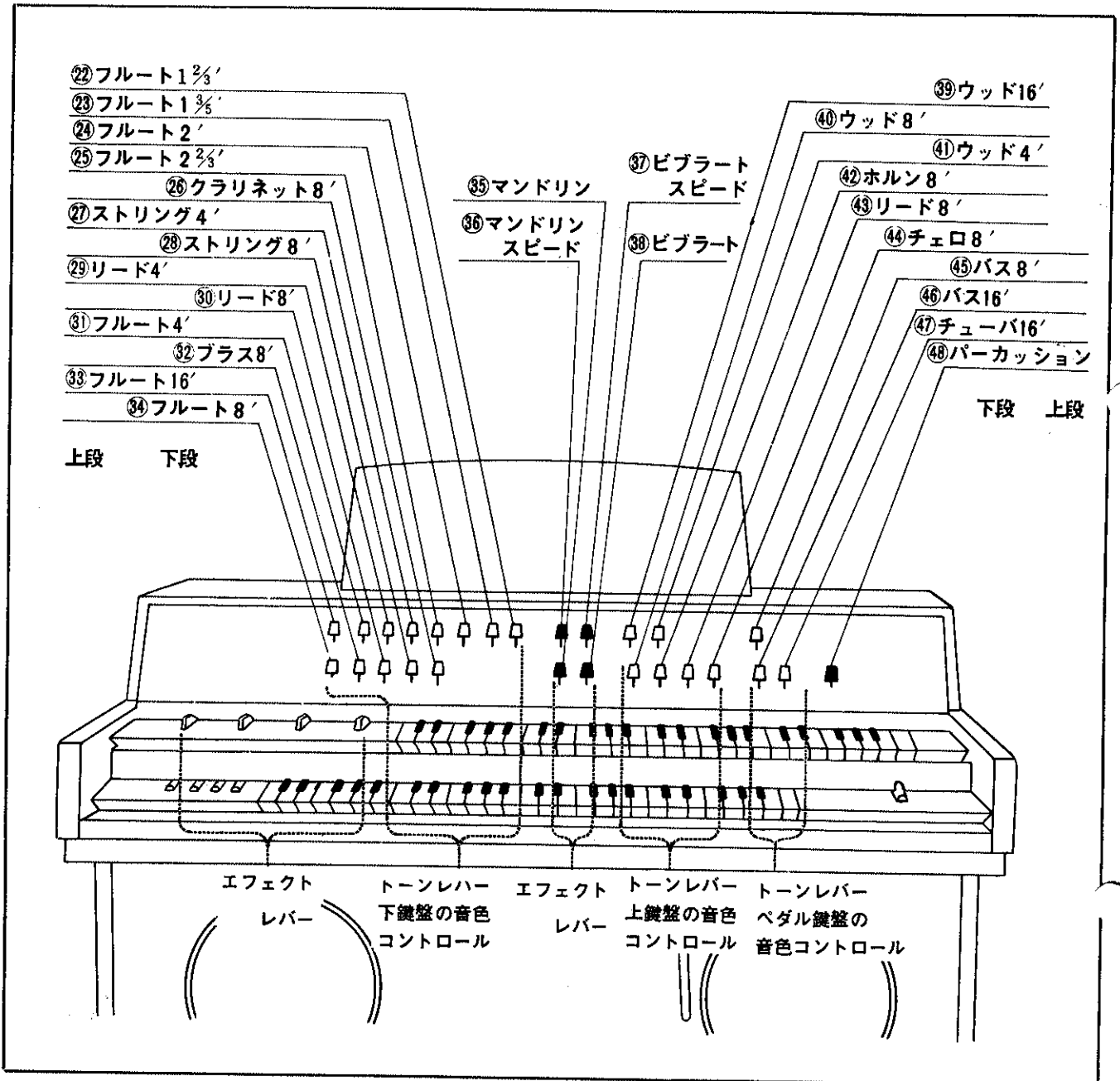
上、下、ペダル のどの鍵盤にサステインをつけるかをきめるのは、上鍵盤の左側にある四つのスイッチのうち、左の三つです。アッパー・サステイン は上鍵盤、ロウワー・サスライン は下鍵盤、ペダル・サステイン はペダル鍵盤に それぞれサステインをつけます。

バランス ⑩

もう一つ残ったスイッチは、バランスーです。上鍵盤と下鍵盤の、音のバランスをとるためのもので、普通は真ん中にしておきます。

しかし、例えば、上鍵盤がメロディーをとり下鍵盤が伴奏の役をはたしている時など下鍵盤の音が強すぎると感じたら、これを右に回して、バランスをとるのです。逆に下鍵盤の音が弱すぎたら左に回します。

トーンレバーの使用法



いよいよ、上鍵盤の上に並んだ、たくさんのレバーについて述べましょう。あんまりいろいろあるので、とまどうかも知れませんが、実際に試しながら読んでください。

トーン・レバー (灰色、白色) ⑪

これらのレバーは、スイッチではなく、一種の音量調節レバーです。上から指先で押し下げて行くにつれ、連続的に音量がふえて来ます。途中で二カ所、ちょっと手ごたえがあります。これはわかり易いように、クリック・ストップになっているため、一番上げた位置を0、一つ目のクリックを1、次を2、下までさげた位置を3、とする四段のメヤスがついています。

トーンレバーは、D-1型のにくらべ二倍以上にふえています。これはカプラーがついたためです。上段の白いレバーがカプラーのもので、下段の灰色のトーンレバーはD-1型とほとんど同じです。

カプラーがついたためにそれぞれ音色の名前の次に8'とか4'とかの数字が書かれています。これは8フィート、4フィートと読みます。パイプオルガンのパイプの長さから来た呼び方です。

下段の灰色のレバーからその音色について説明しましょう。

フルート 8' ③4

一番左の白いレバーは、フルートというトーン・レバーです。フルートは本来開管の管楽器ですが、基音が強く、倍音は少ししかありません、したがって、このトーン・レバーを入れて上鍵盤のキーを押すと、単純ですが少し暗い音がします。

ブラス 8' ③2

金管楽器の音という意味です。この音は、高い倍音までたくさん含んでいるので、より複雑な、鋭い感じになります。明るい音です。

リード 8' ③0

ダブル・リードの楽器、例えばオーボエなどのような音は、基音よりもずっと強い倍音を持っているのが特長です。このトーン・レバーの音も、とくに倍音が強調されて複雑なものになっています。

ストリング ②8

弦楽器の音は、ずっと高い倍音までが豊富に含まれています。そのため複雑で豊かな音色になります。このトーン・レバーによる音も、そうした弦楽器の特長をあらわしています。

クラリネット 8' ②6

丸みをおびて、しかも倍音がうまく配合されている音です。他のトーンレバーとは違った感じの音、や、複雑で表現力が豊かです。

以上の五つのトーン・レバーは、上鍵盤の音色の基本をきめるものです。

次に、黒いレバーをとばして、四つ並んだトーン・レバー④②④③④④は、下鍵盤の音色の基本になるものです。

ウ ッ ド 8' ④①

木管楽器の音。フルートと同じような単純な音ですが、いくらか倍音が入って明るい感じになっています。

ホ ル ン 8' ④②

ホルンの音には、特に強調された倍音はありません。しかし、一定の比例で弱まりながらも、ずっと高い倍音までが含まれているという特長があります。そのため、くせのない豊かな音になっています。

リ ー ド 8' ④③

低音のリード楽器 コントラ・バスーンのように、低いけれど倍音が強調された音です。

チ ェ ロ 8' ④④

ホルンに比べて、やや倍音が強調されて柔らかい、自然なチェロのような音色です。

次に二つ並んだ白いレバー④⑥④⑦は、ペダルの音色の基本です。

バ ス 16' ④⑥

基音が強く、倍音が少ない音ですが非常に低いバスの音域で使われるため、音程がはっきりしないものです。

チューバ 16' ④⑦

これは、倍音を多くして音色を明るく、音程をとりやすくしたものです。バスの音に加えて使うのが普通です。

カ プ ラ ー

上段に並んだ白いトーン・レバーはカプラーのレバーと考えて下さい。カプラーとはカップルを作るもの。つまり一つの音と別の音を組み合わせる働きをします。一つの鍵を押しただけで、幾つもの鍵を組合わせて押した音が出ます。

まず、灰色のトーン・レバー、フルート8'をいっぱいにおろしてみましよう。8'とは、パイプオルガンで8フィートのパイプを基準にして作られた音階と同じ、標準的なものです。もちろんエレクトーンにパイプはありませんがパイプ・オルガンの表現法がそのまま使われているわけです。

次に白いトーン・レバー、たとえば一番左のフルート 16'をいっぱいに入れてみます。16フィートのパイプとおなじです。長さが二倍の共鳴管ですから、音の高さは1オクターブ低くなります。つまりもとの音にオクターブ低い音が加わったのです。

その音はフルート8' だけにもどして出した音と、そのオクターブ下の音をいっしょに鳴らしたのとおなじ二重音です。両方比較してきいてみましょう。

フルート8'にフルート4'を加えると、それはもうおわかりでしょう。1オクターブ上の音をいっしょにひいたのとおなじわけです。音のカップルができました。

しかし、重音でひいたのでは、これらの音は同じ強さでしか重ねられません。カプラーでは、トーン・レバーをどの程度下げるかによって自由に加減が出来るのです。ただの重音ではなく、これは新しい音色が作り出されたのです。

フルート 16' ③③

1オクターブ下のフルートの音がかかります。低い音ですから重みが出ますが、これが強すぎたり、又、単独で使ったりすると基音がオクターブ下ったようになってしまいます。もし、その意味で使えば、上鍵盤の音域が下にオクターブ広がったと考えてもいいわけです。このように音域を広げることもカプラーの使い方の一つです。これはフルート16'にかぎらず、すべてのカプラーについていえることです。

フルート 4' ③①

フルートの音でオクターブ上の音が出ます。この音を加えると音は生き生きとしてきます。8'を弱く、又は、この音を単独で用いれば音域を上へオクターブひろげた使い方も出来ます。

リード 4' ②⑨

リードの音でオクターブ高い音。これを加えると音は、輝やきをまします。勿論、リードの音域を、オクターブひろげるためにも使えます。

ストリング 4' ②⑦

ストリングの音でオクターブ上が出ます。音色がちがうだけで、他の4'と同じことです。

フルート 2²/₃' ②⑤

フルートの音で1オクターブ5度高い音が出ます。

フルート 2' ②④

2オクターブ高い音です。

フルート 1³/₅' ②③

2オクターブ3度上の音。

フルート 1¹/₃' ②②

2オクターブ5度上の音。

最後の四つは長和音の関係になっています。この四つを同じ分量だけ入れて弾くと、一つの鍵を押すだけで高音の和音が出るわけです。メロディをひくと、平行のまま進行します。これは特殊な使い方でしょう。

又、8'に、これらの高い音をいきなり加えることも、ふつうではありません。8'に4'を加えそしてより高い音を……と少しづつ、いわばピラミッド型につみかさねておけば、耳になじみやすい、しかも豪華な音になります。多くのカプラーを使った音は、厚みがあり多様な色彩感にあふれています。

黒いレバーをおいて右側に二つある白いトーン・レバーは、下鍵盤のためのカプラーです。

ウッド 16' ③9

ウッドの音で オクターブ下です。下鍵盤の音に重みを加え、また、低い方に音域を広げます。低い音での迫力ある演奏に使えます。

ウッド 4' ④1

オクターブ上の音、特に低音部でメロディをひくときなど、この音を加えることによって、音がはっきりします。勿論下鍵盤の音域を上げるためにも使えます。

ちょっと間をおいて、ペダル鍵盤のためのカプラーがあります。

バス 8' ④5

バスの音のオクターブ上、これを加えることにより、ペダル鍵盤の音は音程がききとりやすくなり、ペダルでメロディを演奏することも可能になります。

これらのカプラーは、フルートとか、ウッドとかの名前に、あまりとらわれずに使って下さい。

バス8'にリード4'、フルート2'を加えるといった使い方が出来て、その組み合わせは上、下、ペダルのそれぞれの範囲で自由に選べます。上鍵盤のトーンレバーなど、ちょっと教え切れぬ程の組み合わせ方があるわけですが、実例は 後に出る練習曲で見てください。

エフェクトレバー (黒) ③5 ~ ③8 ④8

最後に、黒いレバーが五つ残っています。右端の黒いレバー④8は、パーカッション・ボタンにつながる一種の音量調節器です。これを押し下げてパーカッション・ボタンを叩いて下さい。やはり、クリック・ストップで音量の加減がわかりやすくなっています。

真ん中の黒いレバー四つは、ビブラートとマンドリン効果のためのもので、上、下鍵盤のビブラートの深さ③8、ビブラートのはやさ③7、上鍵盤のマンドリンの深さ③5、スピード③6です。

ブリリアンス

下鍵盤の右側にブリリアンスのレバーがあります。これを左に回すとE-1型の音全体が丸みをおびて、やや暗い音になります。右にまわせば、輝やかしく明るい音になります。

とくに練習のためには、イアホーンのジャックが、鍵盤の右手下側についています。これにイアホーンをつなげば、外に音は出なくなりますから、どんな夜中でもひとりで、心ゆくまで練習が出来るわけです。

演奏はこうして……

楽譜について

エレクトーンの楽譜は、三段に書かれています。それは、特に指定のないかぎり、一番上段が右手で弾く上鍵盤、二段目は、左手の下鍵盤、そして、一番下が、ペダル鍵盤のための譜になっています。

通常、上鍵盤は高音記号、下鍵盤とペダル鍵盤は低音記号で書かれます。

実例

上鍵盤
(右手)

下鍵盤
(左手)

ペダル鍵盤
(左足)

ペダル鍵盤の音は、実音より一オクターブ高く記譜されていますが、これはコントラバスの場合と同じです。

練習曲の音符には、ピアノと同様に運指のための五指の番号がついています。大体はピアノの譜に準じて読めばいいのです。しかし、エレクトーンの譜には、特に音色の変化を指定する記号があるのに注意して下さい。この記号に従って、トーンレバーを入れます。(記号の項参照)

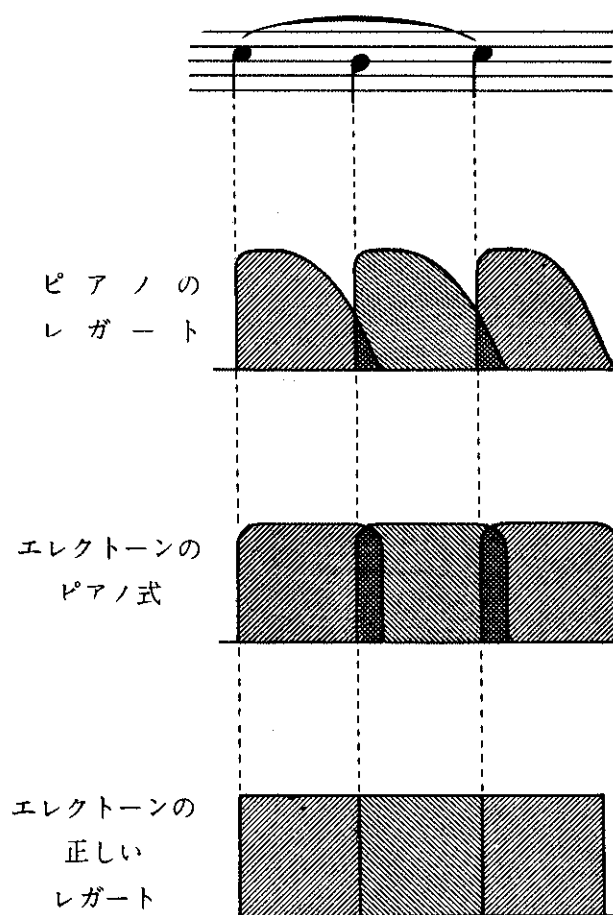
タッチ—レガートとスタッカートについて

今までピアノを弾いていた人が、エレクトーンを弾いてみて一番に戸惑うのは、タッチの差異でしょう。これはエレクトーンにかぎらず、オルガン一般にいえることですが……

まず、キーを叩いても音の強さは全然変わりません。それにはエクスプレッションペダルを踏み込まなければなりません。

それからレガートが大変違って来ます

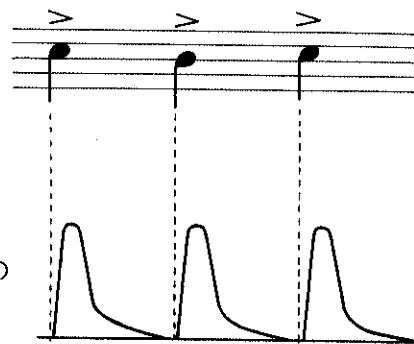
ピアノのキーを叩いた場合ですとキーが下がりきったあたりで、ハンマーが、弦を叩きます。つまり弾く動作よりある程度遅れて音が出ているのです。ところがエレクトーンでは、キーをほんの少し押し下げただけで音が出ます。音の出方が早い…そして、キーを離す瞬間まで、同じ強さの音が続いています。ですから、この楽器を、ピアノ式のレガートで弾くと、音の前後が重なって汚い音になります、これを例えば図で書くと…



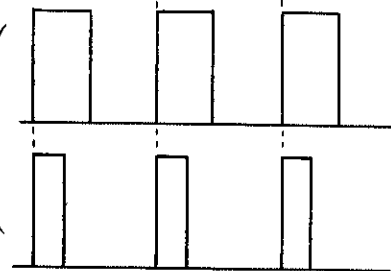
ピアノと違ったタッチで、正しいレガートが弾けるように練習してください。

スタッカットもまた違って来ます。ピアノでは普通キーを打ち逃げするので、音は一瞬だけで、あとは固有の減衰をします。ところがエレクトーンでは、キーを押す時間によって音の長さを変えられます。つまり、いろいろな種類のスタッカットが使い分けられるのです。

ピアノの
スタッカット



エレクトーンの長い
スタッカットは
長いもの
短いものも
ある



ペダルの奏法

足で低音の正しい音程をつかまえるのは、なれない人には、むずかしいことです。

とくに、音程が五度も六度もとんで進行する場合は、キーの間隔が、始めからわかるはずはありません。足もとをのぞいて見るのも仕方ないことです。しかしベース音が音階的進行をする時は、絶対に足を見ないで練習してください。そしてできるだけ早く正確な間隔を、おぼえるように。

足もとを見ていると、姿勢がくずれます。ヒザを開いてのぞき込むと、足に不自然な力が入ってしまいます。

最初の姿勢のところで、身体の重心が、やや右により、左ヒザは、左右に自由に動くようになっていたはずですが、またヒザから下の下肢は、自然にたれ下がったような状態になっていました。つまり、振り子のように動かせるでしょう。この下肢の振り運動とヒザを水平に動かす運動の合成で、つま先を正しいペダル・キーの位置に持って行きます。ヒザを上下させると疲れます。

足首の力を抜いたつま先で、鍵盤上をすれすれになでるように動かします。

キーはつま先で、軽く叩くように踏みます。

つま先の位置は、黒鍵列のすぐ手前にはありますが、足もとを見ないで音をさぐるとき…例えばGならF#をあたって次のキー、といった工合に、黒鍵を基準にしてさがすのも、一つの要領です。

エクспレッションについて

音の強弱——音楽の表情は、右足のエクспレッション・ペダルによってつけます。

クレッシェンドの時は、ごくゆっくり、静かに踏み込んで行きます。

デイミネンドは、ゆっくりもどして行きます。

しかし、いくら音楽にエクспレッションがつくからといって、このペダルを大げさに使いすぎるのはいけません。わざとらしく感じないで、あくまでも、音楽の自然な流れの中に現われた表情であってほしいものです。

トーン・レバーの扱い方

エレクトーンでは、演奏を始める前に、トーンレバーを入れておかなければなりません。これをどう組合わせて入れるか、つまり音色をどうきめるかは、普通、楽譜の最初に指定されています。

しかし、この楽器の演奏になれてきたら、曲の途中でもトーン・レバーを入れ換えるようにすると変化がついていっそう面白くなります。この操作をするのに、左右どちらの手を使うかは編曲によって、それぞれ違います。メロディーがとぎれないように気をつけて、その時の都合のいい方の手でスムーズに入れ換えます。

エレクトーンのトーン・レバーは、多く加えれば加えるほど音量もふえて来ます。いろいろな音を加えて音色を作るという感じで扱って下さい。

トーン・レバーの入れ方によっては、上鍵盤と下鍵盤の音量がアンバランスになることがあります。その時は、バランスーを使って調節します。

記 譜 法

楽譜は三段譜を使用します。

上段は原則として上鍵盤、中段は下鍵盤、下段はペダル鍵盤の楽譜で、ペダルの楽譜は常に実音より1オクターブ高く記譜されています。

本譜のはじめに記入する記号が多いため、本譜とは別に三段を設け、はじめのセットを表示します。

1 トーンレバーの書き方

- トーンレバーの指定はクリックストップの位置 (0~3) で示します。

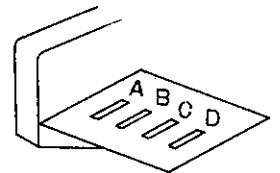
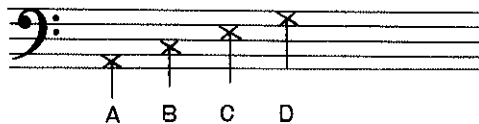
例えば

1	0	0	0	0	0	0	0
3	0	0	0	0			

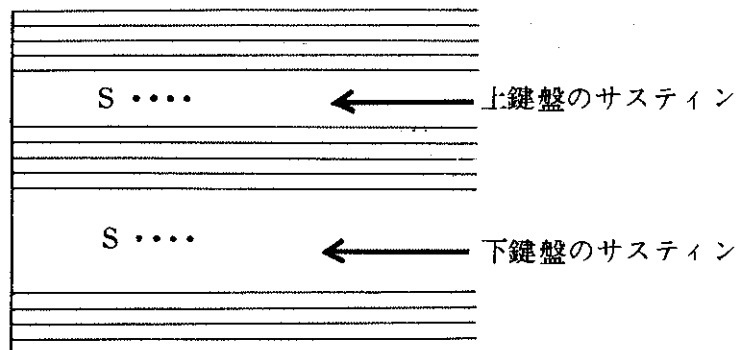
 はフルート16'を1段下げフルート8'を1番下まで押し下げることを意味します。

2 記 号

- \leftarrow: サスティンレバー、バランサー、ブリリアンスレバーを表わし、矢印の方向はレバーの方向を示す
- Vib, M: ビブラート、マンドリン (M: マンドリンoff)
- Vib. S, M. S: ビブラートスピード、マンドリンスピード
- Bvil: ブリリアンス
- Perc: パーカッション



- S.....: サスティン (Soff)



(註) U.S: 上盤鍵盤サスティン

L.S: 下鍵盤サスティン

P.S: ペダルサスティン (PS: off)



日本楽器製造株式会社